

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34

最初に言っておく。

この星ほど人間の繁栄を否定する環境は、おそらくどこにも存在しない。

星を彩る草木も、その環境の礎となる命すらも。

竜の創りだした生態系に淘汰された此処は——何もかも、人の手にあまるものばかりだ。

——だから。

「ぼーや——これよりキミは、人間になった」

荒廃した文明の跡地。古びた建築物は青々と茂り、先史文明の残り香すらも薄まって今や太古の地と化したそんな場所で、よく通る凜とした声音が耳と建物に残響する。

星の超常に喰いつくされたこんな場所であれば、そんな馬鹿げたことすらも起こりうる現象の一つに過ぎないのだろうと、半ば面白半分自分で自分を拾ってくれた恩人が放った言葉に愕然としながら、そんな能天気な事だけが『彼』の頭の中を支配していた。

『—————』

「ははは、やっぱ頭悪いよねキミ。声帯もないのにどうやって喋ろうっていうん——おい待て、爪を立てるな。シャレにならんから」

擲揄いだそうとしたのが目に見えたのですかさず——黒い鱗に覆われた右手から鈍い光を放つ爪をぎらつかせる。

文字通り、『彼』は人間じゃない。

ヒトである恩人を見下ろす高い視界。蒼く冷たい光を放つ縦長の瞳孔に、全身を覆う黒い鱗。

繰り返される呼吸はそれだけで莫大な熱量を持ち、畳まれている鋼色の両翼は鈍く輝いている。

この星に存在したあらゆる命を喰らい、度重なる進化と生態系の頂点に立つ存在——竜の姿そのものだった。

そんな事が在り得るのか、と彼は問う。

だからこそ忘れるな、と彼女は言う。

「いいかい、今からキミに取り付けるコ、レはきっかけに過ぎない。ひとたび装着すれば牙はなくなり、鱗は皮膚となり、翼を失い——竜の力だけがキミの中に宿る」

それは銀の塊だった。無駄な装飾など一切なく、中心に翡翠色の宝玉が沈黙しているだけの、金属の輪っか。

これを付ければ人間に……否、とどのつまり——竜でも人間でもなくなるわけだ。

ヒトでもなく、竜でもない、本当の『独り』となる。

35
36 「そこで、これから独りになるキミに最後の課題を託す。忘れない様に、しっかりそのすつか
37 らかんの頭に叩き込むんだよ」

38 減らず口を叩く恩人へ不意打ち気味に火を放つと——涙目ながら最後の課題を掲示した。

39
40 一つ、塵殺をしなければならないこと。

41 一つ、竜の力をなるたけ隠し通すこと。
42 そして一つ——人間になることだ。

43

44 「竜でありながらヒトの価値観を持ったキミは間違いなく怪物であるだろうが——そんな事は
45 些細な問題でしかない。私と一緒に過ごしたこの数年でキミは、竜がヒトになれる事を証明し
46 てくれた」

47

48 その時の言葉を、彼はきつと忘れないだろう。

49 この先、たとえ本当の独りになって、たとえ地獄に落ちようとも、この言葉を胸に抱えて命
50 が砂塵よりも軽いこの世界を生きる。

51 生きて、生き続ける。

52

53 「だから、これだけ言っておく——生きろ。生きて生きて、死ぬまで生きて、命題を果たせ」

54

55 この会話を最後に——彼女は姿を消した。

56 人間になれ、と彼女は言った。彼を怪物と断じ、それを些末事だと捉えて生きろと輸した彼
57 女の言葉はどう見たって無茶苦茶だ。

58 だからいずれ問おう。自分が人間になれたとき、彼女が託した課題を達成した時、この枯れ

59 た星で生き切ったと胸を張れるように。

60 それだったら——人間のフリだって悪くない。

61

62

「言語Eシ」

63

「肉体ヨシ」

64

65 「視界Eシ」

66
67
68

